

第191回くらしの植物苑観察会 2015年2月28日(土)

-くらしの中に息づく植物-

天野 誠 (千葉県立中央博物館 主任上席研究員)

-樹種の違いによる素材としての木材の多彩な使い分け-

歴史的には、木材の利用は、くらしの中で、大きな位置を占めていました。その利用は、主にエネルギーとしての利用と物を作る素材としての利用に分けられます。すでにエネルギーとしての利用は、薪ストーブやバーベキューの炭など、一部を除いてみられなくなりました。建材としての利用は未だに一定の役割を果たしていますが、そのために利用されるのは、ほぼ針葉樹に限られます。身の回りの道具の材料は、軽くて安価で、どんな形にも成形可能なプラスチックや丈夫さと加工の容易さが利点の金属に取って変わられて、以前に比べ、減ってしまいました。

器材としての木材は、各々の樹種のもつ特性に応じて、様々な用途に使い分けられていました。木材の図鑑には、今でも、木材の生物学的特性、組織学的特徴、物理学的特性のみならず、用途についても、記述されています。加工の手間から、木材から作られる器材は、長期間使われることになります。天然の物で、微細で一定の構造をもつ木材は、乾燥方法の工夫もありますが、加工後の狂い、割れ、収縮などの問題をはらんでいます。また、天然有機物である木材には、腐朽、虫損の恐れがあります。これらの欠点を克服し、それぞれの材の硬さ、加工しやすさ、入手のしやすさ、しなやかさ、重さ、取れる部材の大きさ、さらには色や模様的美しさから、木材の使い分けがされてきました。これらの特性は、主に通導組織（木が生きている時は水分を運び、木材となった時は、一定程度、空気に満たされています）と強さを維持するためにそこに沈着した物質などによって規定されています。模型飛行機作りに使われる軽量のバルサから、水に沈む鉄刀木（タガヤサン）まで、比重は様々です。また、材の色の特徴を模様としてうまく利用した箱根細工はいまでも健在です。このように、木材は様々な用途に利用されています。個々の樹種の具体的な例を示しましょう。

たとえば、スギを取り上げてみましょう。スギは、ヒノキとならび、大きな部材が取れるので、柱として多用されてきました。木目の美しさや耐久性の面で、ヒノキには劣りますが、生育の早さや値段の面で優れています。板としての加工のしやすさから、壁や床にも利用されています。器材としては、適切に加工し、常に水仕事に利用すれば、水に対する強いことから、樽や桶などの容器として利用できます。そのしなやかさを利用すれば、曲げ物として、「わっぱ」と言う名前の弁当箱などのような水分がもれにくい、丸い容器（曲げ物）としての利用もできます。

ケヤキはどうでしょうか。建材としては、大黒柱や梁などの重要な部材に限られます。むしろ、ケヤキの木材としての優秀性は、器材として生かされてきました。適度な加工のしやすさと硬さ、木目の美しさから、タンスなどの家具用に重宝されています。その割れにくさ、材の太さから、臼の材料としても多く使われて来ました。

今では、見かけなくなったカリンの木材はどうでしょうか。大きな部材は取れませんが、硬さと材の美しさを生かして、高価で小さな家具や三味線の棹などに利用されてきました。

今回の観察会では、木材の多様性と用途について、今は失われかけている昔の人の知恵を紹介します。



写真：スギ、ケヤキ、カリンの材の違い

.....
次回予告 第192回くらしの植物苑観察会 2015年3月28日(土)

「くらしの中の信仰と植物」 吉村 郊子(当館歴史研究系 助教)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要